

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

儀礼と象徴：毛沢東生誕110周年の記念行事を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009027

儀礼と象徴——毛沢東生誕一一〇周年の記念行事を中心に

韓 敏

序言

本論は、かつて中国最高指導者であった毛沢東（一八九三—一九七六）の生家である韶山で観察された毛沢東生誕一一〇周年のさまざまな記念行事を分析し、儀礼の空間に用いられたもの、表象行為を、表象主体の語りを通して、毛沢東シンボル化の形とその意味を説明する。

本論で使用する儀礼の意味は宗教儀礼と同義ではなく、儀式的行動、宗教とは直接関係のない世俗的な行事も含まれ、文化のなかの形式化された行動の広い範囲に及ぶ。政府主催の式典やコメモレーション（記念物）、民間の集団・個人々人による記念行事や参拝行為のようなものもこの範疇に入る。また、本論のもうひとつのキーワードである象徴は、何かを代表し、示すあるモノ、動作、あるいはなにかを示すための書かれた文字や記号として用いられている。象徴に関して、人類学者のヴィクター・W・ターナーは次のように鋭く指摘している。象徴（シンボル）とは身体的、道徳的、経済的、政治的等のさまざまな力を現実のものとする手段であり、そのような象徴が際立って明瞭に出現するのが社会の危機的状況や転換期であるという「ターナー一九八二」。象徴に関してターナーの指摘したポイント

は二つある。まずは、象徴する主体の能動性に注目した点である。もう一つのポイントは象徴の出現と社会変化との関係性を語った点であり、いずれも象徴のダイナミズムに着眼するものである。本論文は象徴のダイナミズムに関するターナーの論点から啓発を受けたところが大きい。二〇年も維持されてきた社会主義集団化の組織である人民公社の解散、計画経済から市場経済への移行、グローバル化によって中国社会は大きく揺れ動いている。この転換期にある現在、かつて社会主義計画経済の時代、共産党政権を象徴していた毛沢東の意味づけが大きく変わりつつある。

本論文は三節から構成され、第一節は文献資料と聞き取り調査のデータに基づいて、建国後から一九九三年の一〇〇周年までの公式の生誕祝典を振り返って、儀式に表象される毛沢東の意味とその変化を説明する。第二節においては筆者の現地調査¹⁾と文献資料に基づいて、二〇〇三年生誕一一〇周年の際に毛沢東生誕の地である韶山で行われた政府主催の生誕祝典に焦点を当てて、儀礼化された毛沢東の意味を分析する。第三節は、生誕一一〇周年の韶山で行われた民間団体および個人々の記念行事や参拝行為に注目して、毛沢東シンボル化の諸相を考察する。

一 従来の毛沢東生誕に関する公式の記念行事

筆者の調べた文献資料の中では、毛沢東の生前には政府や共産党組織が主催した公式の生誕記念行事に関する記録が見つからなかった。この点は指導者が存命中に政府や党による公式の生誕祝典を行っていた北朝鮮と旧ソ連とは違う。毛の生誕祝典に関する公式の記念行事は彼が亡くなった一九七六年から、徐々に見られるようになった(表1)。

毛沢東が亡くなった年の一九七六年十二月三日、彼の生誕八三周年を記念するために、『偉大的領袖和導師毛

儀礼と象徴

表1 韶山における政府主催の生誕記念行事

周年	主催者	行事	場所	参加者	注
83	北京市	韶山～北京の松明リレー競走	韶山～北京	北京の国営企業労働者・農民・機関の公務員、学生	1976年12月1日～1977年2月末
	韶山学校	ひまわりの種と松の種の寄贈	北京の毛沢東記念堂	韶山学校の教師と学生	
95	不明	書道・絵画・切手の展示会	韶山	25の省・市・自治区および港澳地区の作品	1988年12月25日
97	国務院	湘潭市韶山区から韶山市への昇格			1990年12月26日
100	湖南省委・政府	毛銅像の除幕式	韶山銅像広場	一般公開	江沢民主席・除幕12月20日
	中央テレビ局・湖南テレビ局	文芸の夕べ(歌、踊り、コント、京劇、花鼓劇)			歌手・俳優800人余、毛の家族、毛の側近が出席。12月22日
	毛沢東記念館	記念毛沢東生誕100周年書画展示会	韶山記念館	一般公開	
	毛沢東記念館	毛沢東一族の歴史展示会	韶山記念館	一般公開	
	郵電部	毛沢東生誕100記念切手発行式	韶山銅像広場		12月26日
101	韶山管理局	報告会と詩歌朗読会	韶山管理局		
104	湘潭市・韶山市	毛・鄧・江の著作の学習	韶山毛沢東図書館	古参党员	
	韶山市	5000メートル長距離競走	毛の故居—韶山駅	市民	

沢東出席「永垂不朽」という当時、きわめて珍しかったカラー映画が正式に上演された（『人民日報』一九七六年二月二三日（三版））。翌年の一九七七年二月二十六日に中国共産党の宣伝部と政府部門の文化部が毛沢東生誕祝賀の演芸を共催した。以来、毎年誕生日前後になると、宣伝部と文化部による生誕祝典の共催が慣例として行われるようになって、今日に至っている。

毛沢東生誕の地・韶山における公式の生誕記念行事に関する最初の記録は、毛が亡くなった年の一九七六年二月一日から始まった「北京から韶山へ」という象徴的たいまつリレーである（『人民日報』一九七六年二月一日）。記事によれば、毛沢東生誕八三周年を記念し、北京市主催の「北京から韶山へ」というタイトルのたいまつリレー競走が行われた。北京市各国営企業の労働者、農民、政府機関の公務員と学校の青少年がこのたいまつリレーに参加した。北京から韶山までの一七〇〇キロメートルのコースを完走するために、参加者たちは二月一日に北京からスタートして二月末に韶山に到着する予定だった。たいまつリレーは、真の共産主義社会が実現するまで革命のたいまつを代々伝えて行くことを象徴するものと報道された。イデオロギー重視の一九七〇年代において、共産党政権の中心から共産党政権の指導者だった毛沢東の生誕の地までのたいまつリレーは、共産党政権の不滅、共産主義革命精神の不滅を象徴するものであり、この公式の生誕記念行事の中で毛沢東は共産主義革命のシンボルとして表象されていた。

その後、新しい指導者の鄧小平による改革開放路線への転換によって、政府の言説やメディアには脱イデオロギー化がみられた。特に一九八一年六月の中国共産党二期六中全会において、『建国以来党内の若干の歴史問題に関する決議』が採択され、そこで毛沢東の仕掛けた文化大革命が否定されて、毛沢東の建国以来の政策について、成功の業績は七割、誤りは三割という評価が出された。

毛の生誕九五周年の一九八八年、韶山は全国規模の著名な書画家展覧会を開催し、全国二五の省・市・自治区お

よび香港・マカオから数多くの作品が展覧された。毛の後継者であり、のちに失脚した華国鋒や汪東興のようなかつての側近だった人たちのみが参加した。一九九〇年一月二六日、毛沢東生誕九七周年の際に、國務院は韶山区を韶山市に昇格させた^②。

一九九三年毛沢東生誕一〇〇周年の際は、全国的に毛ブームのクライマックスを迎え、生誕の地の韶山においてさまざまな公式の祝典や記念行事が開催された。その中で、毛沢東の銅像という新しいモニュメントの設立とその除幕式典、全国生中継の演芸の夕べがもつとも盛大な行事であった。

韶山の中央広場に現れた毛沢東の銅像は、一九四九年一月一日の開国盛典において、北京の天安門城楼で中華人民共和国の設立を宣言した中山服の姿が模されており、中国の主要な創設者としての毛の地位を象徴するものである。文革のころ各地で作られた軍服姿の毛の塑像とは歴然と異なる。銅像の除幕式は一九九三年一月二〇日に湖南省委員会と省政府によって共催され、当時の最高実力者の江沢民国家主席が参加し、自ら除幕を行なった。

一月二二日の夜に中央テレビと湖南テレビ局が毛の生家の前で「人間正道是蒼桑（人間の正しき道は、これ変化なり）」という大型演芸の夕べを開催した。演芸のタイトル「人間正道是蒼桑」は毛沢東の詩歌からとったものである。湖南省トップリーダーたち、毛の家族の代表、毛の元側近と数多くの地元の人々が出席した。全国から八〇〇名あまりの著名な芸能人がステージで「東方紅」、さまざまな舞踏、コント、京劇、湖南地方劇の花鼓戲などを披露し、毛沢東の業績と彼の後継者の率いた改革開放時代の成果を讃え、共産党政権の連続性を表現した。

毛の数々の賛美歌の中でもっともよく知られ、歌われているのは「東方紅」である。この歌は一九四二年に当時革命根拠地の陝北省佳県出身の貧しい農民、李有源によって、陝北の古い民謡『走西口』^{ソイシコウ}のメロディを元に新しい歌詞を入れて作られた歌である。文化大革命のころ、『東方紅』は国歌に準ずる地位に上り、政府の主催する会議や行事、学校や職場などの会議や儀式が始まる際に必ず歌われていた。この歌とともに、太陽は毛沢東のシンボル

としてのイメージも定着した「韓 二〇〇五・五三三」。毛沢東の公式生誕式典においても民間祭祀においても、「東方紅」の歌と太陽は、毛沢東を象徴するシンボルとして頻繁に出現している。

一〇〇周年の一九九三年から一一〇周年の二〇〇三年までの間、韶山では大規模な公的記念行事は行なわれず、主として韶山市政府と韶山管理局が主体の学習会、詩歌朗読会のような小規模のものであった（表1）。ただし、ここで一つ注目しておきたいのは、政府による銅像の設立と除幕式が毛沢東をめぐる民間の参拝活動に与えた影響である。一九九三年に毛沢東の銅像ができてから、地元韶山と遠方から年々多くの人びとが参拝に来るようになった。特に毛沢東の生誕の日や正月前後になると、銅像広場はいつも参拝の客で賑わっている。その詳細については第三節で触れる。

本節では建国後から二〇〇三年までの毛沢東生誕に関する公式の記念行事を振り返った。そのまとめとして次のことが言える。指導者が存命中に生誕祝いを行っていた北朝鮮、旧ソ連の社会主義国家と違って、中国政府による毛沢東生誕の公式の祝いは、毛沢東の死後、彼の後継者たち及び地方政府によって始められたものである。イデオロギー重視の一九七〇年代において毛沢東は主として共産主義革命のシンボルとして表象されていたが、市場経済、脱イデオロギーの一九九〇年代において、公式の生誕祝いの儀式や行事の中の毛沢東は歴史化され、中華人民共和国の創設者として表象され、現政権との連続性が演出されていた。

二 生誕一一〇周年の政府主催の記念行事

二〇〇三年の毛沢東生誕一一〇周年の際、韶山で行われた政府主催の記念行事は、主に四つの部分から構成されている。湖南省共産党委員会と湖南省政府共催の毛沢東記念館リニユーアル開館式典、「東方紅詩詞歌会」という

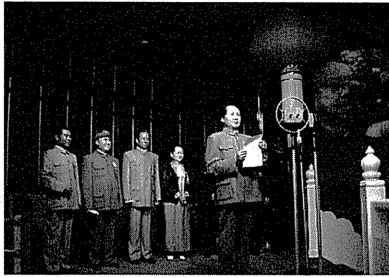


写真1 リニューアルされた毛沢東記念館における蠟人形の毛沢東とその他の建国功労者たち（2003年、筆者撮影）

タイトルの大型演芸、韶山市主催の「邵華將軍写真展」^③と中国県市報研究会・韶山市政府共催の「毛主席は永遠にわれらのこころにあり」という作文コンクール^④である。毛沢東記念館リニューアル開館式典と「東方紅詩詞歌会」の演芸が四つのうちのメインイベントなので、本論文の分析対象にする。

毛沢東記念館リニューアル開館式典と「東方紅詩詞歌会」は同じ日、同じ場所で続けて行われた。

一二月二四日午前九時、韶山銅像広場の前で湖南省共産党委員会と湖南省政府共催の毛沢東記念館リニューアル開館式典が行われた。湖南省指導部の人々、毛の息子の妻と孫、毛のかつての側近がゲストとして式典に出席し、韶山および周囲の幹部、関係者たちが三〇〇人ほど参加した。入場券が必要なので、一般の人が自由に入入りしないように柵で会場が作られた。

式典において、湖南省共産党委員会の代表が毛の生涯を簡潔に振り返り、その功績を讃え、生誕の祝辞を述べる。同時に、毛の故郷としての湖南省の今後の発展について話した。その後、式典に出席した人たちがリニューアルされた毛沢東記念館を見学した。リニューアルされた記念館は、遺品で構成された毛沢東とその家族の「感情世界」という展示コーナを新設し、蠟人形、動画、レーザーなどによる新しい展示法を試みた（写真1）。

リニューアル開館式典と見学が一時間で終了した後、湖南省党委員会と湖南テレビ局共催の「東方紅詩詞歌会」が一〇時に銅像広場で始まった。演芸の内容は、主として毛沢東の作った詩歌の朗読、毛沢東を賛美する歌と踊りによって構成され、およそ二時間続いた。全国から著名な俳優、声優、歌手、ダンサーが参加して、役者の数は一〇〇〇人を超えた。入場券を持っていない、遠くから舞台をみていた人々を含めて、当日の観衆の数は一万人あまりに達した。

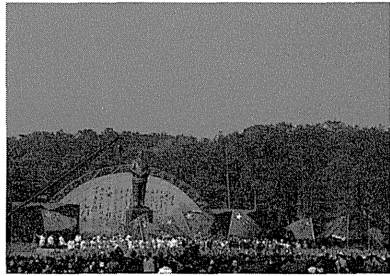


写真2 毛沢東生誕110周年の式典舞台
(2003年、筆者撮影)

以下では、「東方紅詩詞歌会」演芸の進行順に、ステージの仕組みとそこにおける毛沢東の象徴性を分析する。

1 共産党政権と国家を演出する舞台の構造

演芸の舞台は毛沢東銅像を中心とし、毛自筆の詩歌、「沁園春・雪」の詩歌が巨大な白い幕に書かれて舞台の背景を成した(写真2)。演芸舞台の周りには労働者・農民・兵士・商人・学生など、中国社会を構成する各階層を代表する観衆が整然と座っており、その真ん中には、湖南省党委員会のトップリーダーや毛の家族の代表が座った。

「東方紅」の音楽が流れるなか、演芸は始まった。まず、中国の女性ロック歌手のトップといわれる、モンゴル族出身のステインゲルエが「日出韶山」(太陽が韶山から出る)を歌い、つづいて、趙大地が陝北節で「東方紅」を歌った。その後、毛の役に扮した著名な俳優の唐国强が登場して、毛の詩歌「沁園春・雪」を朗読した。

「日出韶山」の歌は毛の生誕を象徴するものであり、「東方紅」は毛沢東を太陽にたとえて中国における共産党政権の出現を比喻する歌である。そして毛が一九三六年二月陝西省で作った詩歌「沁園春・雪」は、悠久の歴史をさかのぼり、歴史上の英雄をとらえたあと、もつとも優れた英雄は現在の革命者であると断言して、中国の統一と新しい社会づくりの抱負を感じさせ、共産党政権の勝利を隠喩したものである。

北国風光

北国ほくこくの風光よ

千里氷封

千里こちり氷こおり封ふうじ

万里雪飄
望長城内外
惟余莽莽
大河上下
頓失滔滔
山舞銀蛇
原馳蠟象
欲與天公試比高
須晴日
看 紅裝素裹
分外妖嬈
江山如此多嬌
引無數英雄競折腰
惜 秦皇漢武
略輸文采
唐宗宋祖
稍遜風騷
一代天驕
成吉思汗

万里 雪 ひるがえる
長城の内と外を望めば
惟だ ほうほうたるを 余すのみ
大河の上下
たちまち 滔滔たるを失う
山には 銀蛇舞い
原には 蠟象馳せり
天公と 高さ比べを試みんとす
晴れし日をまち
紅の装いと しろきころもを看れば
ことのほか 妖しく嬌めかしからん
江山 かくのごといたく嬌めかしく
無数の英雄を引いて われがちに折腰をせしめぬ
惜しむらくは 秦皇 漢武
少し 文采において輸け
唐宗 宋祖
やや 風騷においてゆずる
一代の天驕
ジンギスカンも

只識弯弓射大雕

ただ 弓をひいておおわしを射るのを知るのみ

俱往矣

みな すぎにけり

数 風流人物

風流の人物を数えるには

還看今朝

なお 今日を看よ

〔武田・竹内 一九六五・二二五―二二七参照〕

毛の作った数々の詩歌の中で、「沁園春・雪」はもともと強烈な個性と迫力のあるものとされよく取り上げられ、いまでも一部の地域の空港やホテルの壁装飾としてよく利用されている。

上記の三つの出し物が終わると、演芸は一九二〇年代から二一世紀の現在まで時代順に進行され、毛沢東の作った詩歌を軸に、各時代の物語が歌と舞踏にあわせて展開されていた。毛の作った数々の詩歌の中から共産党歴史のターニングポイントとなる出来事を詠う六つの歌が選ばれ、有名な俳優と声優によって朗読された。六つの詩歌のうちの五つは建国前に作られたものである。

2 農村革命根拠地における共産党政権の出現

国民党と共産党との内戦時代の舞台は、毛の詩歌「西江月・井冈山」と、当時の流行歌「農友歌」「兒童团团歌」「工農兵聯合起来」「八月桂花遍地開（金木犀が香る八月）」と踊りによって構成され、革命根拠地⁵⁾における共産党政権の出現と土地革命の歴史を再現した。

「西江月・井冈山」は一九二八年に共産党が江西省で農村根拠地を創設したときに作られた詩歌であり、日増しに成長してきた共産党根拠地と紅軍に希望をもてるようになったことを唱っている。この詩歌にあわせて、七九歳の有名なソプラノ歌手、王昆が二〇世紀初期の中国に流行っていた「農友歌」を歌った。

霹靂一声震哪乾坤啊

雷が乾坤に震動する

打倒土豪和劣紳啊

土豪と悪質な地主を打倒する

往日窮人矮三寸哪

昔の貧乏人は地位が低かった

如今是頂天立地的人哪

いまは世界を背負って立つ人間だ

天下的農友要哇翻身哪、

下の農民たち、立ち上がれ

自己当家作主人哪

自分で主人公となれ

一切權利歸農會呀

すべての権利は農民協会にある

共產黨是我們引路人哪

共産党はわれわれの導きだ

歌にあわせて紅軍、農民、土豪劣紳ヒンライフンに扮したバツクダンサーたちが、土豪劣紳打倒の土地革命のストーリーを踊りて演出した。

共産党根拠地の土地改革に関連するもうひとつの流行歌、「八月桂花遍地開（金木犀が香る八月）」が歌われた。この歌は陝北革命根拠地の民謡から改編された「東方紅」と同じように、革命根拠地の安徽省大別山地域の歌謡、「八段錦」から改編されたものであり、一九二九年から一九三〇年の間に盛んに歌われた。革命政権の樹立と土地をもらった農民たちの歓喜と、新しい世界を作っていく自信に満ちた歌詞である。舞台で同時に演じられている毛の詩歌「農友歌」「八月桂花遍地開」の歌と舞踊は、毛沢東と共産党が率いた土地革命が、長年にわたる地主支配を終わらせて農民を解放し、伝統的な秩序としての「四つの権力」（地主支配・同族支配・宗教支配・家父長制支配）を打破し、新しい秩序と自分たちのための政権を作ろうとしたメッセージを伝えた。

3 長征と南京占領によつて象徴された共産党政権の試練と確立

毛が一九三〇年代に作った詩歌「憶秦娥・婁山関」「七律・長征」が唐国強によつて朗読された。「憶秦娥・婁山関」は、一九三五年二月、長征の途中の貴州で作られたものである。「七律・長征」は一九三五年一〇月、長征が終了した直後に作られた、長征の全行程を振り返つて、記念碑的モニュメントを思わせる詩歌である。

詩歌の朗読とともに三〇年代に革命根拠地で流行つた江西の民謡「十送紅軍」、陝西の民謡「山丹丹開花紅艷々（真つ赤に咲いたヒメユリ）」「咱們的領袖毛沢東（われわれのリーダー毛沢東）」が歌われた。バックダンサーたちは、江西省瑞金革命根拠地をあとにする紅軍を見送る地元の人々の切ない気持ち、苦難に満ちた長征、陝北根拠地に到達した紅軍と地元の民衆の歓喜、共産党政権のシンボルである毛沢東への崇拜の情景を再現した。

四〇年代の詩歌として、「七律・人民解放軍 南京を占領す」が選ばれ朗読された。これは一九四九年四月に共産党解放軍が国民党政権の所在地南京を占領した歴史の決定的転換点にあつた作品であり、国民党から共産党への政権交替と社会制度の激変が目の前に来ている雰囲気を描いた迫力のある詩歌である。

鐘山風雨起蒼黃

鐘山の風雨 蒼黄を起こす

百万雄師過大江

百万の雄師 大江を過る

虎踞竜盤今勝昔

虎踞り竜盤るとして 今は昔に勝れるよ

天翻地覆慨而慷

天を翻し地を覆さんと 慨而慷

宜將剩勇追窮寇

宜しく 剩る勇をもちて窮寇を追え

不可沽名学霸王

名を沽らんとて 霸王に学ぶべからず

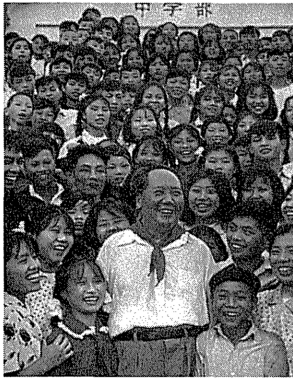


写真3 毛沢東と韶山学校の生徒たち (1959年)

(写真3)。男性の名前は蔣含宇、女性の名前は彭淑清である。一二年後に彼らは結婚した。舞台の上で彼らは、自分たちの因縁は毛沢東によって成就させられたもので、今日の生誕祝いのために戻ってきたと話した。スペシャルゲストの後に、七〇年代に流行っていた歌、「挑担茶葉上北京」(茶の葉を担いで北京へ行く)が濃厚な湖南節で歌われた。湖南のお茶作りの農民が、北京にいる毛沢東に故郷でとれた新茶を届けるという内容であり、毛に対する故郷の人々の親しさを物語った歌であった。

この詩歌朗読のあと、舞台では無数の歌手とダンサーは、四〇年代に創作され、盛んに歌われていた「解放区的天」(解放区の空)を歌い、解放区の青空の下で人民だれもが人民政府の誕生、革命政権がもたらす豊かで活気ある生活を踊りで表現した。

4 建国後の新しい聖地——韶山

建国後の毛の詩歌の中からは、「七律・韶山に到る」のみが選ばれて朗読された。一九五九年六月二五日に毛沢東が三二年ぶりに故郷の韶山に戻ったときに作ったものである^⑥。詩歌の朗読が終ると、二人のスペシャルゲストが舞台上に登場してきた。彼らは一四歳の時に韶山学校の全校生徒の代表に選ばれ、韶山学校を訪問した毛沢東に少年先鋒対隊のシンボルである赤いスカーフ、「紅領巾」をプレゼントして毛の両隣で一緒に写真を撮った人物である

天若有情天易老
人間正道是滄桑
天もし情あらば 天もまた老いん
人間の正しき道は 是 滄桑なり

〔武田・竹内 一九六五・二五四〕

続いて文化大革命のころ流行っていた「汽車が韶山に向かって走る」も歌われた。一九六六年の時点では長沙から韶山までは鉄道がしかれていなかったため、韶山まではバスで一日がかりであった。一九六七年二月、長沙から韶山までの一一五キロの距離の鉄道の建設が着工され、同年一二月全線開通した。汽車開通を記念するために、「汽車が韶山に向かって」という歌まで作られ、全国で流行った。聖地韶山に向かう汽車の中には楽器を弾くチベット族のおじいさん、歌を歌うモンゴル族のおじさん、踊りを踊る新疆からのお姉さん、という表現を通して、にぎやかな車内風景を描写したと同時に、モンゴル族、チベット族、ウイグル族などの少数民族を含む全国の人々があがっていた聖地韶山の人気ぶりを物語っている。

上記の里帰りの毛詩歌の朗読、韶山学校のスペシャルゲストの登場、湖南の節で歌われたお茶作りの農民の歌は毛とふるさとの間のつながりと親しさを表現するものであるのに対して、「汽車が韶山に向かって走る」は全国の人々の聖地韶山に対するあこがれを表象するものである。いずれも毛の地域性を強調するものであるように思われる。

5 「歌唱祖国」と政権の連続性

毛沢東が亡くなった後、政治優先の時代から経済優先の改革開放の時代に移り変わる。その変化は「在希望的田野上」「年輕的朋友來相會」の二曲のさわやかな歌によってたくみに象徴されている。

八〇年代初期に全国で流行っていた「在希望的田野上」は、長年にわたる文革の闘争で分離した中国人のところが、希望の田野が象徴する中国近代化の未来図という新しい求心力に引き付けられていることを物語った。また、「年輕的朋友來相會」は悪夢のような文革が終焉し、平和の時代を迎えた中国人の喜びと精神的余裕が滲み出ている。新しい改革開放時代の到来を象徴したこの二曲の後、定番の「歌唱祖国」の音楽が会場に流れ、毛沢東・周恩来・

劉少奇・朱徳・鄧小平・任弼時の六人のそっくりさんがステージにあがり、観衆たちに手を振り、一〇〇〇人あまりの役者たちに囲まれ、舞台の下にいる労働者・農民・解放軍・商人・学生を演じた観衆と一緒に「歌唱祖国」を合唱した。

国旗が掲揚され、人びとは歓声を上げ、興奮していた。共和国の過去と現在が一体化した一瞬である。昂揚の雰囲気包まれ一体となり、大きな盛り上がりを見せた会場は政治祭典そのものである。舞台両側の大型スクリーンには、毛沢東・鄧小平・江沢民・胡錦濤の四つの世代の指導者の映像が絶えず流された。建国の父である毛を表象すると同時に国家の継続性を演出したのである。

以上の毛沢東生誕一一〇周年の公式の記念行事をまとめると、次のことを指摘することができる。

まず、毛沢東記念館リニユーアル開館式典と「東方紅詩詞歌会」の演芸は、一定の方向性をもった作爲的な内容のコメモレーションであるといえよう。二時間の演芸舞台は一九二〇年代から二二世紀の現在までの時間を演出し、各時代において毛沢東が作った詩歌、あるいは毛を賛美する歌を歌うことによって、毛沢東が共産党、その軍隊、とその政権の創始者、中国近代史のターニングポイントに当たって勝利の方向へ導いた指導者として演出されている。同時に、ステージに四世代の指導者の映像やそれぞれの時代の流行歌を用いて、共産党政権、国家の継続性を演出している。この意味で、生誕一一〇周年の記念行事は統一的過去・現在・未来を構築する作爲的な営みとしての記念行事といえよう。

一方、イデオロギー的主張のみに収斂されない多様な表象性が見られる事実も見逃すことができない。里帰りの詩歌「七律・韶山に到る」、韶山学校のスペシャルゲストの登場、湖南の農民の心情を託した「挑担茶葉上北京」の歌からは、人情が窺われ、いずれも毛沢東と出身地の湖南とのつながりを表すものである。これは記念行事を主

催する湖南省政府と地元テレビ局の、地元の人々の気持ちに対する配慮として捉えることができる。同時に「汽車が韶山に向かって走る」の演出は、かつての聖地韶山の人気ぶりを再発信することによって、対外的に集客効果をねらうという主催者側の意図がまったくもないといえない。

三 生誕一一〇周年の韶山における民間の祭祀活動

第二節では一九九三年に毛沢東の銅像ができて以後、彼の誕生日や正月になると、地元の人々が集まってきて、祭祀活動を行うようになったことに触れた。本節では、生誕一一〇周年の韶山銅像広場において、韶山の地元の人々、外部の集団参拝者、個人参拝者がどのような記念活動と祭祀活動を展開したのかを分析し、そこで表象された毛沢東の意味づけを解明する。

1 韶山村民による祭祀活動

二〇〇三年一月二六日生誕一一〇周年の朝、韶山地元の人々が徐々に銅像広場に集まってきた。外部の参拝者と同じように爆竹を鳴らし、紙銭を焼いて、跪いて参拝する人もいれば、立って合掌する人もいる。中にはケーキなどの供え物を持ってくる人もいる。

このような多くの個人的な祭祀活動のほかに、集団的祭祀活動と記念活動も観察された。

まず、銅像の前で豚を供えるという恒例化された祭祀活動がある。二〇〇三年一月二六日の午前、「毛家飯店」の創設者である湯瑞仁と二〇人ほどの村人が銅像広場に四角いテーブルを並べ、テーブルの上に調理した豚肉、魚、鳥肉、ご飯、酒などを供えた。そして爆竹をならし、紙銭を焼きながら、全員が毛沢東銅像に向かって「東方紅」



写真4 韶山農民による祭祀活動
(2003年、筆者撮影)

を歌った(写真4)。

歌を歌い終わると、その場で一匹の豚を解体し、毛に供えた。周りに多くの観衆が集まってきて、写真をとろうとする人も多かった。その中の一人、広東省韶関から来たアマチュアカメラマンは(表2の41番)、「韶山の祭祀民俗の場面が好きで、わざわざ今日のために来ている。一〇〇周年の時、韶関のある記者は韶山の祭祀活動の写真を撮って『広東日報』の写真コンクールで受賞した。それをみてとても悔しかった。今回自分も是非いいのをとりたい」と筆者に語った。

このカメラマンの証言と韶山の村人の語りは一致している。韶山の村人の話によると、銅像広場ができてから、毎年お正月や誕生日になると、村人が広場で参拝するようになっていく。少数の人が祭祀用の豚を銅像広場に運んできて銅像の前で解体するが、ほとんどの家は、自宅で豚、羊、鳥などを供えものとして解体して生誕祝いしている。

筆者の観察、広東省韶関のカメラマンの証言と韶山の村人の話は、毛沢東に関する韶山農民の祭祀活動が定例化していることを裏付けている。

上記の祭祀活動のほかに、韶山村の年寄りによる記念行事も行われている。二〇〇三年二月二十六日の正午、韶山村の年寄りが例年通り村民委員会に集まり、長寿麵を食べて毛沢東の生誕祝いを行なった。また、韶山村の六〇人あまりの農婦たちが鮮やかな衣装を着て銅像広場で「腰鼓」の民間舞踊を披露して生誕祝いを行った。周りには多くの人が集まってきて、にぎやかな祭りのような雰囲気になった。

第3部 グローバル時代における革命の記憶と構造転換

表2 韶山の参拝者聞き取り調査

番号	性別	同行者	住む場所	年齢	職業	回数	備考
1	男	5人(息子・長沙の嫁一家)	黒龍江・鶏西市	53歳	炭鉱労働者	初回	現在、自分が働いている国営企業が不振。
2	男	0人	北京・豊台区	40歳		不明	「実践共産主義」というホームページの創設者。われわれは腐敗はいらない。マルクス、レーニン主義と毛沢東思想の正しい方向性が必要。正真正銘の人民のための政党がほしいと言っている。
3	男	1人(部下)	北京市	40代	軍人	初回	出張で来ている。
4	女	1人(男性講師)	河北	40代	講師	不明	
5	男	0人	河南・新郷市	53	企業幹部(元軍人)	2回目(93年)	毛は永遠に偉人。民心を得ている。110周年のために韶山市記念行事主催者に1100元を寄附した。
6	男	0人	河南・新郷市	50歳	公務員	2回目(93年)	仏より毛を拝んだほうが効く。毛はほんとうに中国を救ったから。
7	男	6人(同僚)	河南・南陽市	50代	サラリーマン(会計士)	初回	毛一家が革命のために命を捧げたこと、毛の質素な生活ぶりに感銘した。大変敬慕している。
8	男	1人(妻)	同上	50代	不明	数回	家からもってきた棗、枸杞子、酒を銅像広場の傍に供え、線香をたてた。
9	男	0人	河南・洛陽	56歳	農民	初回	サンザシを売りながら、生誕祝いのために韶山に来た。
10	男	団体(80人)	河南・周口	50～60代	農民	4回	願掛け：5年間、生誕祝いに来続ける。鎮政府がバスを貸し切る。宿泊費と食事代は自己負担。23歳の女性もいる。
11	男	28人(党員教師)	江西・平郷市	40代	教師	2回目(1回目は15歳)	職場の記念行事として公費できている。

儀礼と象徴

							われわれのところは小学校の修学旅行先は安源、中・高校の修学旅行先は聖地の韶山。もう慣例になっている。
12	男	0人	河南	40代前半		不明	生誕祝いのために来ている。
13	男	8人(仲間)	河南			不明	観光ツアーできている。
14	女	0人	河南	40代	不明	不明	軍服が好きで着てきた。
15	女	34人(仲間)	湖北・武漢	40代	不明	何度も	誕生日にきた。一行35人、自発的に毎年来ている。河北の「講壇」を聞いて泣き崩れた。
16	女	10人(仲間)	湖北・武漢			2回目	自発的に来た。
17	男	0人	湖北・咸寧市	50歳	労働者	3回目(66、03年)	軍服姿で毛バッジもつけている。レイオフされている
18	女	1人(同僚)	湖北	30代	サラリーマン(会計士)	不明	出張で来ている。さすが偉人の実家だけあって、よい環境に恵まれている。
19	男	4人(父、息子、教える)	湖南・邵陽市	40代	教師	初回	父は84歳。ほんとうは北京の毛沢東記念堂に行きたかった。遠いし、旅費も高いためやめた。6時間もバスに乗って、毛の住んだところを見にきた。
20	男	1人(妻)	同上	70代	炭鉱労働者	3回目(67、71年)	
21	男	0人	湖南・懷化市	48歳	公安局幹部	不明	文革中、革命の意思表示のため、自ら自分の名前を張要武にかえた。毛グッズのコレクションをしている。
22	男	1人(記者)	湖南・江永県(瑶族出身)	40代	小学校教師	2回目(93年)	毛バッジで作った扁額をもってきた。
23	男	1人(教師)	湖南・江永県	40代	記者	2回目(93年)	22番の男の取材のため。

第3部 グローバル時代における革命の記憶と構造転換

24	女	7人(患者)	湖南・沅江市	50歳	シャーマン	18回目	孤児だった。娘が四人。生活が苦しかった。山に3年もこもってシャーマンに。1985年から毎年韶山に来ている。毛が自分に憑いている。無料でみんなの病気を治している。彼女のクライアントの一人は、毛はわれわれの心の中で永遠の聖人だと語った。
25	男	49人(党员)	湖南・冷水市	50代	農民	2回目(98年)	党支部のイベントとして22歳から82歳までの党员が来た。
26	男	3人(妻・息子・娘)	湖南・湘鄉市	30代		複数	長男が明日10歳の誕生日。将来毛主席のようになってほしい。
27	女	20人(仲間)	同上	30代	農民	複数	
28	男	3人(妻・仲間)	湖南・株洲市	40代	労働者	不明	レイオフされている。毛思想は偉大だった。いま貧富の格差は大きくなったし、人間も狡賢くなっている。
29	女	12人(近所)	湖南・花明楼	20代	農民	何度も	近いからよく来る。
30	男	6人(近所)	湖南・湘潭市大坪	21歳	農民	不明	誕生日に来た。毛は中国を変えた。深圳でアルバイトをしたことがある。今日、30元ぐらいの爆竹を鳴らした。
31	女	40人(小学生)	湖南・湘潭市	30代	教師	複数	大坪小学校の記念行事として韶山に来た。
32	女	3人(仕事仲間)	湖南・長沙	17歳	飲食店の従業員	初回	毛は偉大な人物であり、中国に多大な貢献をした。
33	女	9人(家族)	湖南・韶山市	30代	鉄道局	数回	年2回、お正月と誕生日に家族で来る。爆竹をならし、線香をあげて、3回礼拝する。
34	女	1人(姉妹)	同上	30代と40代	労働者	三回目(前回は学生のころ)	レイオフされている。毛沢東は真龍天子。明日、滴水洞にも行って祭祀をする。

儀礼と象徴

35	男	6人	同上	17 - 22歳	学生	複数	偉人を敬慕している。故居、記念館、銅像を見学した。
36	男	0人	江西・柳州市	22歳	公務員	初回	一ヶ月かけて自転車で社会調査をしながら韶山に来た。毛沢東誕生日を国家記念日にするための署名キャンペーンの手伝いをしている。
37	男	0人	同上	25歳	サラリーマン	初回	心の中で毛沢東を敬慕。われわれの世代は物欲に満ちている。理想がない。
38	男	13人(同僚)	広西	30代	公務員	不明	環境衛生所の記念行事として公費で来た
39	男	10人(仕事仲間)	広西・南寧	45歳	商人	不明	毛を敬愛している。
40	男	仲間7人	広東・三亜市	40代	ホテルの従業員	初回	前々から韶山に来たかった。
41	男	2人(カメラ愛好者)	広東・韶関	59歳	アマチュアカメラマン	初回	韶山の民間祭祀の場面が好き。いい写真を撮りたい。
42	男	0人	広東・深圳	40代	不明	不明	「実践共産主義」HPのファン
43	男	2人	雲南・麗江	60代		不明	雲南・麗江の毛氏一族の代表として韶山の毛氏一族を訪ね、相互の族譜を確かめ、同宗同祖であることを確認したという。
44	男	0人	不明	50代	道士	不明	現実に不満。「実践共産主義」HP創立者の講演に共鳴。

2 外部参拝者とその参拝行為

二〇〇三年生誕一一〇周年前後、韶山は連日参拝者で賑わった。筆者は数多くの参拝者の中から四四組、計三九六人に、住む場所、目的、年齢、職業、韶山に来る回数、感想などについて、聞き取り調査を行った(表2)。

まず、参拝者の職業は、人数の多い順に次の通りとなっている。農民(二三人)、学生(五一人)、教師(三一人)、公務員・幹部(二〇人)、ホテル・飲食店の従業員(二二人)、国営企業労働者(二一人)、商人(二一人)、サラリーマン(二〇人)、記者(二人)、道士(二人)、ジャーマン(二人)など多岐に分かれている。

参拝者の年齢からみて、小学生から八四歳までの高齢者がいて、年齢はさまざまであるが、文化大革命を経験した四〇代〜六〇代の人をもっとも多く、合わせて約五八%を占めている(表3)。

参拝者の来た場所からみて、湖南省からの参拝者は一七六人でもっとも多く、全体の四四%を占めている。その次に多いのは河南省からの参拝者であり、一〇三人、二六%を占めている。残りの一一七人は黒龍江省、北京、河北省、河南省、江西省、湖北省、広西省、広東省、雲南省から来ている。また、韶山に来る回数について、三九六人のうち、初めてと答えた人は四〇人、回数不明者が八二人、残りの七割近くの二七四人は二回以上韶山に来ていると答えている。

インタビューを受けた四四組のうち、五組は職場、党組織、学校の行事として来ている団体である。たとえば、11、25と38の場合、職場の共産党支部が中国共産党の創設者の毛沢東を記念するために党組織の記念行事の一環として公費で韶山に来ている。それに対して、31の場合、学校の先生が学校教育の一環として、四〇名の小学生を連れて愛国主義教育基地の韶山に来ている。10の場合、河南省周口市周口鎮の八〇名の農民から構成された祭礼隊である。祭礼隊の大半は五〇代〜六〇代の男性によって構成されている。最高年齢は七三歳で、二三歳のような若い

儀礼と象徴

表3 参拝者の年齢構成

年齢	人数	%
10代以下	52	13.1
20 - 30代	97	24.5
40代	114	28.8
50 - 60代	116	29.3
70代以上	5	1.2
不明	12	3
合計	396	100

女性も入っている。祭礼隊は古典的な装いで、荘重な音楽が流れる中で、銅像広場で祭礼の踊りを披露した。河南省八〇名の農民祭礼隊のメンバーたちは、五年連続して毛沢東生誕日に韶山に来て祭礼を行なうことを願掛けした。筆者が観察した二〇〇三年の祭礼披露はその四回目であった。農民祭礼隊が河南から湖南に移動する際、周口鎮政府が車を出す、道中の食事と宿泊は参加者の自己負担となる。

以上の五組の参拝団体はいずれも職場、学校あるいは行政が企画したり、関与したりするものである。筆者がインタビューした四四組の内の残りの三九組は、個人参拝者である。この人たちの参拝方法には大きな共通点が見られる。それは焼香・紙銭・爆竹↓供え物↓感謝・願掛け(立つ/跪拜)↓銅像の三回めぐり↓合掌という参拝図式である。すなわち、銅像の前に来て焼香し、紙銭を燃やすか爆竹を鳴らし、供え物をし、跪拝する。感謝を表すと同時に新たな願掛けをしてから、毛沢東銅像を三回めぐって、最後に合掌して銅像広場から去っていく。

また、供え物は生の穀物、酒、菓子が多く、ヘビースモーカーの毛沢東にタバコを
用意している人もいる。

祈願内容は、「平安無事」「商売繁盛」「学業向上」と「迎福攘災」といったものが多い。これらの祈願内容は、「現世利益」という中国人、特に漢族の宗教心理の表れである。「一人一人によって、儀礼の編成方式や手順はちがうはずであるが、漢民族全体にわたり共通した目的がそこにみえてくる。それは『迎福攘災』『渡邊 一九九一…六』である。

一方、このような伝統的参拝方法のほかに、毛グッツを身につけたり、展示したり、毛沢東時代の歌を歌う人もいる。筆者がインタビューをした三九六人の内、九人(表2の2、4、17、22、23、24、36、37)と他の参拝者の六人、合計一五人が毛バッジを胸につけていた。

その中で17の男性はきわめて印象的であった。湖北省から来た彼は七〇年代の軍服と軍人コートを着て毛バッジもつけていた。「軍人ではないが、軍服は毛時代の服だから好きだ……あのときはみんなが一人のため、一人がみんなのための時代だった。いま、農民は確かに増産しているが、しかし増収にはなっていない。妻も私もレイオフさされている。エイズや性病が充滿している。とんでもない世の中だ」と一気に語り続けた。男性の語りから、毛時代への郷愁、現代社会に対する不満と疎外感がうかがわれると同時に、軍服と毛バッジの着用からは、毛沢東は解雇もエイズもなく、貧富の格差が少なかった時代のシンボルであることがうかがわれる。

一方、銅像の向こう側にある毛沢東記念館の前には三〇人近くの人が集まっていた。毛バッジをつけていた中年男性(2)が毛沢東記念館の前で、銅像広場に向かってスピーカーで「同志よ、無数の革命の先烈は共産主義の事業のために自分たちの命を犠牲にした。今日、われわれも共産主義のために個人の利益を捨てるべきである。われわれは腐敗はいらない。マルクス、レーニン主義と毛沢東思想の正しい方向性が必要だ。人民のために全身全霊で奉仕する真正正銘の政党がほしい。社会主義の共同富裕の道を歩みたい。是非社会主義の正しい方向を堅持しよう」と訴えた。

彼は「実践共産主義」というホームページの創設者であり、今日のために河北から来た。彼の右後ろでは二人の男女が赤い横断幕を掲げた。そこには「緬懷毛沢東。高拳毛沢東思想偉大紅旗、踏着先烈的血跡乘勝前進」(毛沢東を追憶する。毛沢東の旗を高く挙げ、革命の先輩たちの切り開いた道を進もう)の文字が書かれていた。その左後ろには毛沢東と彼が選んだ後継者の華国鋒の肖像を掲げる中年女性と、ホームページのアドレスが大きく書かれた赤い横断幕を掲げる人がいた。毛沢東と華国鋒の肖像は、かつて貧しかったが共同富裕を目標とした時代の象徴として使われている。中年男性の演説の合間に、誰かが毛沢東と共産党を賛美する古い歌、「東方紅」と文化大革命時期の流行歌「天大地大」を歌い始めると、周りの人がそれに付随して一緒に歌っていた。「天大地大」は共産党と毛沢東の

恩情やプロレタリアの階級愛を賞賛する歌である。

演説の内容、旗に書かれたスローガン、歌の内容からは、共同富裕を目標とした時代への郷愁、市場経済とグローバル化に伴うかつてない疎外感、国家からの保護が得られなくなった民衆の不安、官僚のエゴと汚職腐敗、貧富の格差などの社会問題からきた鬱憤が伺われた。

さまざまな参拝者の中には、二人の広西からの青年(表2の36、37)がいた。そのうちの一人(36)は地方公務員であり、一ヶ月かけて自転車で韶山に来た。来る途中に彼は社会調査をしながら毛沢東誕生日を国家記念日にする署名キャンペーンの手伝いをしていた。韶山の銅像広場でも署名の紙をもって署名を集めていた。

署名キャンペーンは、二〇〇三年に「毛沢東の旗」という民間のウェブサイトで他の一四のウェブサイトと連携して始めたもので、毛を建国の父、世界の偉人として永遠に記念するため、その誕生日である二月二十六日を国の記念日にする署名を集め、全人代(日本の国会にあたる組織で、中国における国家権力の最高機関)に提出して承認してもらうという内容のキャンペーンである。この署名キャンペーンは北京在住の引退した幹部達を中心に呼びかけたもので、全国的に練り広げている。

もう一人(表2の37)は不動産会社に勤めている二〇代の若者であり、「心の中で毛沢東を敬慕している。われわれの世代は物欲に満ちている。理想がない。われわれの若い世代を個人主義の束縛から解放してほしい。毛にはわれわれが必要な時代精神・民族精神がある」と語った。

必要な時代精神・民族精神とは具体的になんなのかという筆者の質問に対して、二人の若者は大公無私、自強不息(自らつとめ励んでやまない)、堅忍不拔(どこまでも耐え抜く精神)と不撓不屈の四つを挙げた。

グローバル化が進み、拝金主義や利己主義が氾濫するなか、新しい時代精神、民族の精神性を求めるさまざまな傾向が出てきている。その動きの中、毛沢東は民族精神の化身として一部の若者や古参幹部の間で人気を集めてい

るようである。36と37のような文化大革命や計画経済の時代を経験したことのない一部の若者は、毛沢東に民族精神を見出そうとしている。

韶山毛沢東銅像広場では多様な声が交差している。個々人の語りと参拝行為の中から、毛沢東は無事息災、商売繁盛などを祈願する対象である神、平等主義時代のシンボル、人民のための政權、不屈の精神を持つネーション・ヒーローの意味あいを読み取れ、多様に表象されている。毛バッジの持つ意味も延安時代の共産党政權の視覚的表象から、文化大革命時期の支配者や国家への忠誠のしるしへと変わり、さらに二一世紀のいま、民衆の抵抗と郷愁のシンボルとなっている。

結び

以上、かつて中国最高指導者であった毛沢東に関する公式の生誕祝典と民間祭祀を取り上げ、儀式に象徴されている毛沢東の意味とその変化を解明してきた。

毛沢東に関する公式の生誕祝典は彼の死後、彼の後継者の政治戦略と地方のイニシアティブによってはじめられたものである。共産主義イデオロギー重視の一九七〇年代において、毛沢東は革命のシンボルとして表象されていたが、市場経済、脱イデオロギーの一九九〇年代とグローバル化の二一世紀において、生誕祝典の中の毛沢東は歴史化され、国家の創設者として表象され、現政權との連続性が演出されている。労働者・農民・兵士・商人・学生などによって構成された生誕祝典の舞台は、中国社会を構成する各階層を象徴するものである。このように象徴的な舞台を用いて、ネーション・ヒーローである毛を表象し、毛の詩歌の朗読、各時代の流行歌、共産党政權の四世代の指導者の写真と映像、指導者をつくりさんの登場を通して「特定の過去を選択し、一定の様式のもとにこれを

表象することで、『われわれに共通する記憶』を作り出し」[森村 一九九九：二三五]、国家の継続性とナショナルな記憶を視覚化している。毛の公式の生誕式典は近代中国の形成における共産党の歴史の再確認・再構築の場としての役割を果たしている。「過去は、物語によって構築されるものであった。そして記憶は記録ではなく、現在の観点から取捨選択され、また物語を紡ぐ素材として物語に見合うように想起されるものであった」[片桐 二〇〇三：一八二]。

一方、さまざまな背景を持つ参拝者たちは、韶山における毛生誕一〇周年式典という特別の空間と時間において、様々な祭祀行事と参拝行為を通して個人的な、あるいはある集団、階層の記憶を表象し、シンボルを創出しようとしている。個人と象徴との関係を人類学的に位置づけたオベイエセケレ (O. Obeyesekere) は、社会変化の下で個人が旧来のまったく伝統的なシンボルの意味から身をのりだして、新たな意味を創造する可能性を述べた [Obeyesekere 1981]。韶山の事例でわかるように、計画経済から市場経済への急激な社会変化やグローバル化を経験している中国の民衆は、供え物、爆竹、焼香、礼拝、祈願などのものと身体表現を通して、毛沢東が守護神、「真龍天子」であることを象徴している。また、毛バッジ、肖像、軍服、横断幕のスローガン、革命時代の流行歌などのものと身体表現を通して、平等的な社会秩序、失った時代への郷愁を表象している。

「象徴は、意味を明らかにすると同時に、隠すことにも用いられる」[クーバー 一九八七：二二二]。毛バッジ、軍服、そして毛自身の肖像と華国鋒の肖像は、現代社会への無言の抵抗に用いられている象徴でもある。

社会の危機的状況や転換期に象徴が際立って明瞭に出現すると指摘したターナーは、ザンビアのンデンプ社会の儀式シンボルに着目し、一つのシンボルのうちにさまざまな意味が凝縮され、ンデンプ世界の中心的なシンボルであるミルクの木を例にして、それは女性の胸、母性、儀礼の新加入者、母系原理などの多層的な意味を象徴し、社会の秩序や規範を表わすイデオロギー的な意味の極と、分泌、血液など身体生理的な感覚の極とにひろがる意味の

幅をもつことを明らかにした「ターナー 一九八二」。

毛はかつての中国、とくに文化大革命時期において、さまざまな意味が凝縮され、国家、党、軍の化身、社会主義イデオロギー、中国社会の中心的なシンボルとなり、ソ連社会の「ミルクの木」のような存在であった。現在、人民公社の解散、計画経済から市場経済への移行、グローバル化によって中国社会は大きく変化し、毛沢東、毛の出身地、毛グッズの象徴する意味も大きく変わっている[Mason 1994; Han 2001]。忠誠のシンボルからノスタルジア・抵抗・祈願などの意味をもつようになった毛バッジはその例である。「三農問題」^⑦がまた十分注目され、解決されていなかった二〇〇三年ごろ、農民あるいはかつての農民出身の人にとって、韶山は毛を敬愛する場というより、腐敗と不平を批判する場になっているといえるかもしれない。競争原理、効率・利潤の追求、消費主義、拝金主義などの新たなディスコースが支配的になると、農民、国営企業の失業者のような一部の人びとには失語現象が起きて、社会的弱者になってしまう。こうして、かつて農民や労働者たちの政治的ステータスを認め、社会的平等を目指した毛沢東は、失語状態になっている農民と労働者にとって抵抗を表象するシンボルとなっている。

ただし、毛沢東生誕の地で観察された上記の分析結果を、中国全土まで一般化することはまた危険なことである。韶山で観察された民間人による演説、スローガン、語り、歌、祭祀儀礼は、場所を変えれば再現性や重複性が観察できない可能性が大きい。韶山で観察されたさまざまな儀礼は、ある意味で韶山という場所の多義性によるものである。すなわち、中央政府にとって韶山は共産党政権を樹立した建国の父の生誕の地であり、愛国主義教育の本拠地である。また、地元政府にとっては、毛沢東の知名度を、地域のイメージ向上、他の地域との差異化に利用し、観光事業などの地域開発に結びつける傾向がある。一方、民衆にとって、かつて政治的聖地であった韶山はいま、ノスタルジアの場、不満・抵抗の気持ちを訴え、発信する場、崇拜・祈願の場となっている。韶山という場所の多義性は、市場経済とグローバル化の現在における「脱イデオロギー化と聖地の個人化」^⑧〔韓 二〇〇七：六四〕を意味

するだろう。

以上、毛沢東生誕一一〇周年の公式生誕式典と民間の祭祀儀礼と記念行事から、脱イデオロギー化とグローバルの現在において、毛沢東は西アフリカのンデンブ社会における「ミルクの木」のように、多層的な象徴性をもつ巨大な象徴資本になりつつあり、毛沢東の意味論の個人化が進んでいる。今後、人々がこの象徴資本から如何なる新たな意味を作り出すのかは注目すべきところである。

注

- (1) 毛沢東の象徴と生誕一一〇周年の記念行事に関して、筆者は二〇〇三年一月五日から二九日にかけて北京、瀋陽、陝西省、四川省の丹巴県と湖南省韶山で聞き取り調査を行った。本論文は主として毛沢東の生誕の地である湖南省韶山での調査に基づいたものである。その際、筆者は村人、村民委員会、観光エージェンシー、観光客、政府の幹部、合わせて四〇〇人あまりの人々にインタビューを行った。
- (2) 建国初期において、韶山は湖南省湘潭県の下に置かれていたが、文化大革命の一九六八年二月に韶山は地区ランクの特区に昇格され、湘潭地区と同様のランクとなり、直接湖南省に帰属することになった。一九八一年二月に韶山特区は建国初期の湘潭県の下に置かれ、一九八四年五月に県ランクの区に昇格された。
- (3) 邵華は毛沢東の二番目の息子の妻、少将のランクを持っている軍人である。二〇〇三年二月二四日、韶山で開幕した写真展には、彼女と他のカメラマンが撮影した毛沢東の各時期の写真と自然風景の写真一一〇点が展示された。
- (4) 全国二六の省・市・自治区から三〇〇〇以上の作品が作文コンクールに出された。
- (5) 国民党政権が大陸を支配していた時期に中国共産党が実効支配した地域のことを、中国ではソビエト区、革命根拠地、解放区と呼ぶ。
- (6) 毛沢東が建国後、故郷の韶山に帰ってきたのは二度だけであり、それぞれ、毛沢東が中国現代史を方向づけるような重要な決定を下す直前のことである。一回目は、一九五九年、廬山会議の直前。毛沢東は、この会議で人民公社の成否を巡り、人民公社制度に反対した同郷の同志、彭德懷国防部長を解任した。二回目は、一九六六年、文化大革命の構想を移行し始めた時期

である。

(7) 三農問題とは、「農業」の低生産性、「農村」の荒廃、「農民」の貧困の、「農」が抱える三つの問題のことを言い、中国の経済社会の持続的発展を脅かす不安定要因となっている。問題の中心は、農民所得の伸び悩みとそれによる都市部と農村部の所得格差の拡大にある。

参考文献

片桐雅隆

二〇〇三 『過去と記憶の社会学——自己論からの展開』京都・世界思想社

韓敏

二〇〇五 『毛沢東の記憶と神格化——中国陝西省北部の「三老廟」の事例研究にもとづいて』国立民族学博物館研究報告

二九(四)・四九九—五五〇 大阪・国立民族学博物館

二〇〇七 『観光化される毛沢東——中国観光を作り出すしかけ』山下晋司編『観光文化学』五九—六四、東京・新曜社

クーバー、ジーン(日下陽右・白井義昭訳)

一九八七 『シンボリズム——象徴の比較文化』東京・彩流社

ターナー、ヴィクター(梶原景昭訳)

一九八一 『象徴と社会』東京・紀伊國屋書店

武田康淳・竹内実

一九六五 『毛沢東 その詩と人生』東京・文芸春秋

森村敏巳

一九九九 『「記憶の形」が表象するもの』阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏巳編『記憶のかたち——コメモレ

イシヨンの文化史』二二五—二四三、東京・柏書房

渡邊欣雄

一九九一 『漢民族の宗教——社会人類学的研究』東京・第一書房

Han Min

- 2001 The Meaning of Mao in Mao Tourism of Shaoshan. In *Tourism, Anthropology and China*, Tan Chee-Beng, Sidney C.H. Cheung and Yang Hui (eds.), pp.215-236, Bangkok Lotus Press.
- Obyeseke, G.
1981 *Madusa's Hair: An Assay on Personal Symbols and Religious Experience*. Chicago: University of Chicago Press.
- Watson, James
1994 *The Director Sides. Fairbank Center News Letter*. Cambridge, Mass.: Harvard University, Fairbank Center.